

## 編 集 後 記

この度、平成29年5月より編集委員を拝命しました。神経学会の機関誌である「臨床神経学」の発展に少しでも貢献できるよう努力して参りますので、よろしくお願いたします。

「臨床神経学」はご存じのように症例報告が多いのが特徴です。インターネットの登場により海外雑誌への投稿の敷居が低くなった昨今、果たして日本語で症例報告を書く意味があるのか？、日本語を理解できる人のみを対象にしている雑誌に投稿して意味があるのか？(abstractは英語で閲覧可能ですが)と考えられるかもしれません。また、1例1例の積み重ねが大事だというのはわかるが、英語で症例報告を書いて、世界の人目に触れてこそ、論文の意義があるのではないか？と思われるかもしれません。実は私の最初の論文は英語での症例報告でした。当時は医師になって1年目で右も左もわからない状況で、とりあえず上司の先生から、英語で症例報告を書くように、といわれて闇雲に書いた記憶があります。今思えば、かなり無理していたと思います。その後、日本語、英語、どちらの論文も作成していますが、日本語の論文を書くようになって初めて、論文の構成、書き方が身についた気がします。やはり母国語で論文を作成する意義は十分にあると感じます。貴重だと思う症例を、日本語できちんとした論文にまとめ上

げ、ちゃんと形に残す、そして、それを他の医師と共有するという事は非常に大切です。特に若い医師の鍛錬の場として、日本語の雑誌を大切にしていかなければならないと思います。

日々の診療では小さなものも含めて新たな発見がいろいろあると思います。このような積み重ねが、他の神経内科医の診療の参考になることはよくあります。ついそのままにしてしまう、日々の「気づき」を、是非、「臨床神経学」に投稿してみませんか？大げさかもしれませんが、この「気づき」の積み重ねが、日本の神経内科の診療レベルの向上に寄与するものと思います。

編集委員を始めたことで、多くの論文を査読する機会を得ました。その中で、それぞれの先生の「気づき」をより読者の先生方にわかりやすく伝えるためにはどうしたら良いか、そして投稿していただいた論文を少しでも良いものにするにはどうしたらよいかを考えながら査読しています。「臨床神経学」の編集委員を担当して、他の編集委員の先生のご意見を聞くと、こんなに著者のことを考えている雑誌はないのではないか、と感じます。皆様の、特に若い先生方からの、多くの投稿をお待ちしています。

(新野 正明)

## 〈 編 集 委 員 〉

編集委員長 園生 雅弘 編集副委員長 高尾 昌樹  
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡  
 鈴木 匡子 坪井 義夫 西野 一三 星野 晴彦  
 編集委員(幹事兼任) 小野寺 理 新野 正明 三澤 園子

「臨床神経学」	第57巻 第11号	平成29年11月1日発行	
編 集 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		一般社団法人日本神経学会
発 行 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		高 橋 良 輔
印 刷 所	〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入		中西印刷株式会社

発 行 所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル  
 日 本 神 経 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>